乃木大將夫人の歌

吉丸一昌作歌
大和田愛羅作曲

国立国会図書館

特105
731イ

始

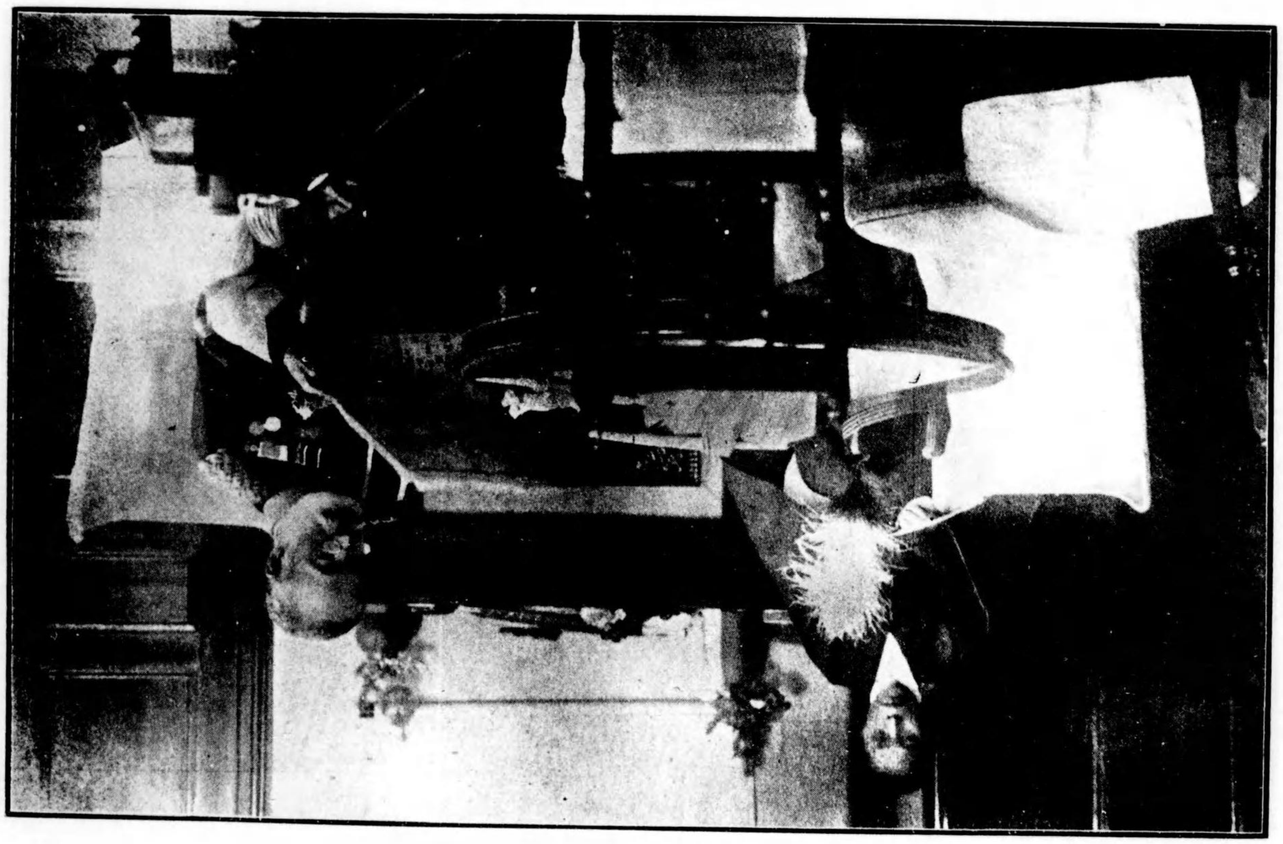
P-91
特105
73/1

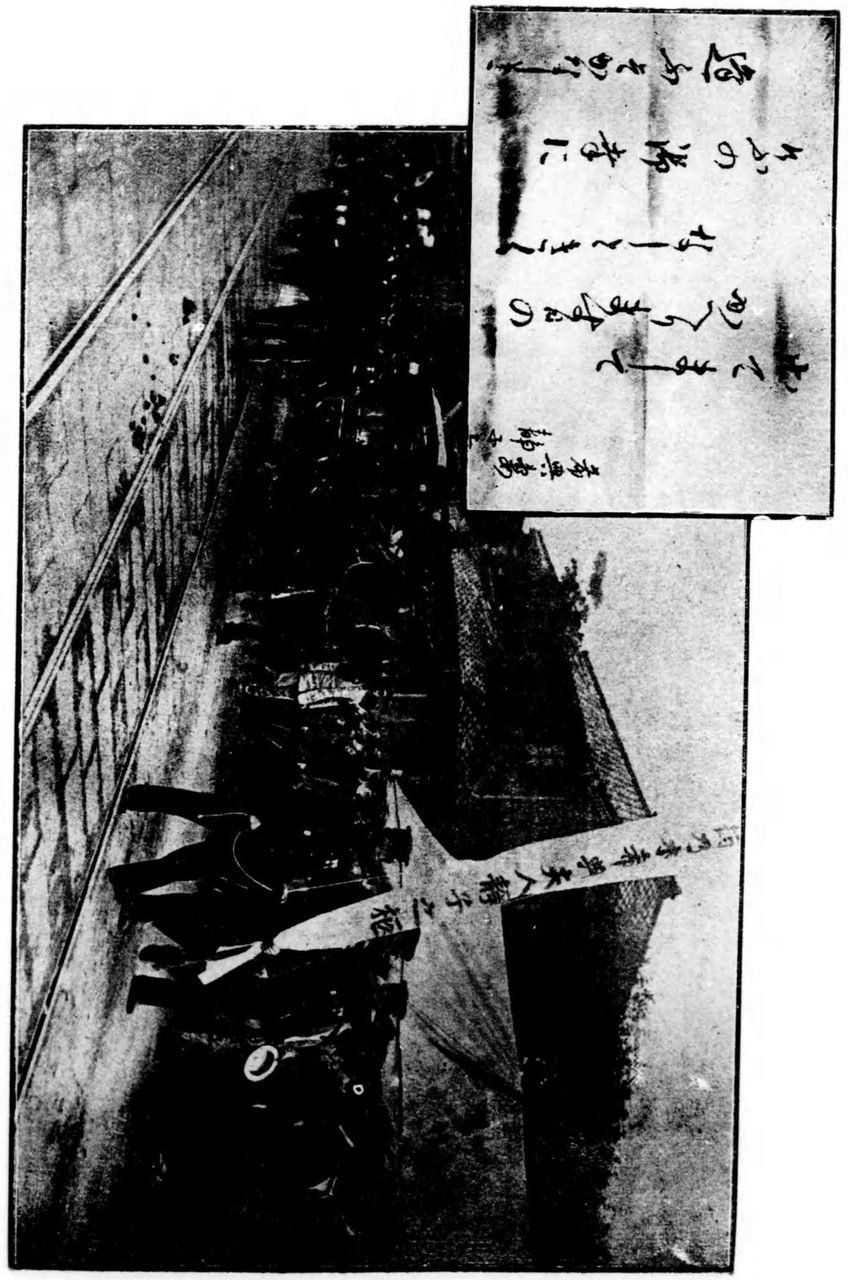
乃木大將夫人の歌

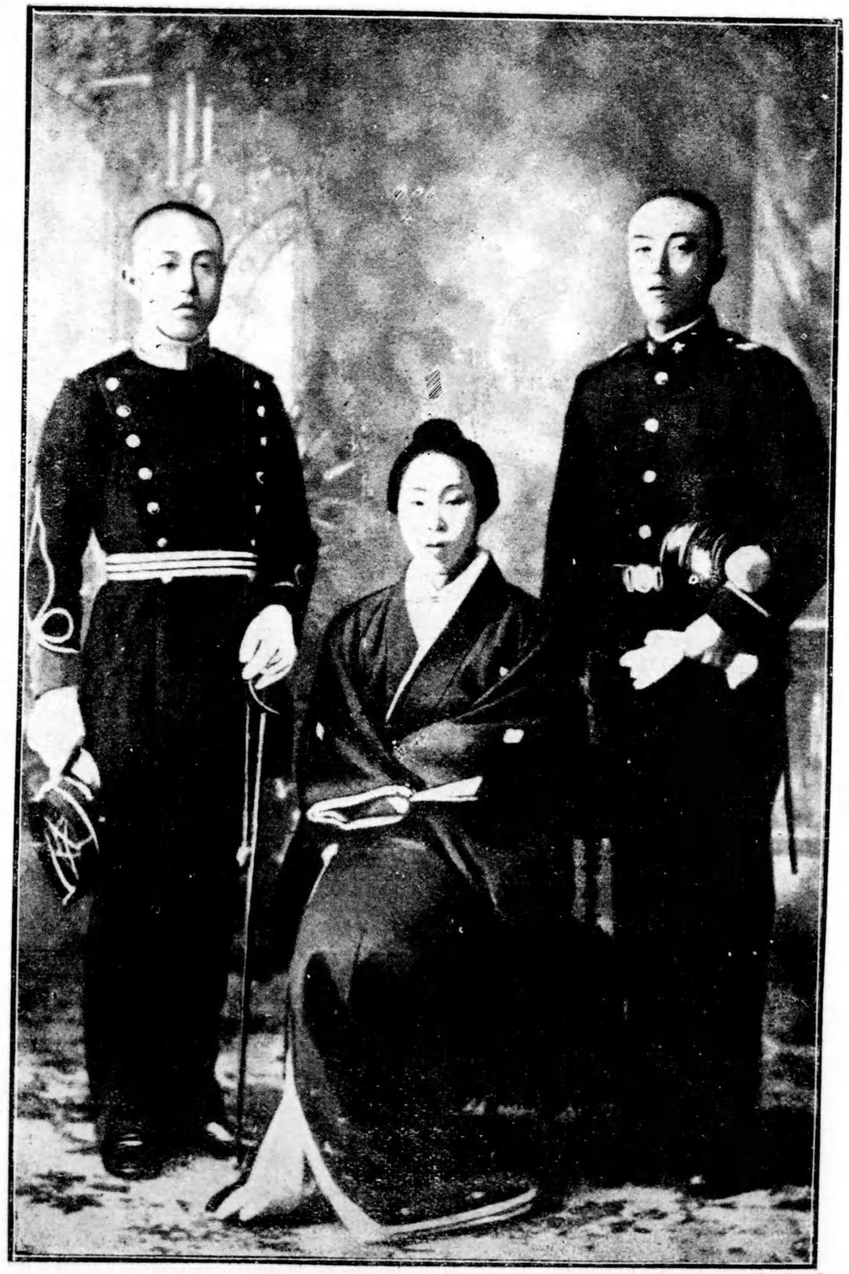
東京音樂學校教授 文學士 吉丸一昌先生作歌
東京府女子師範學校教諭 大和田愛羅先生作曲

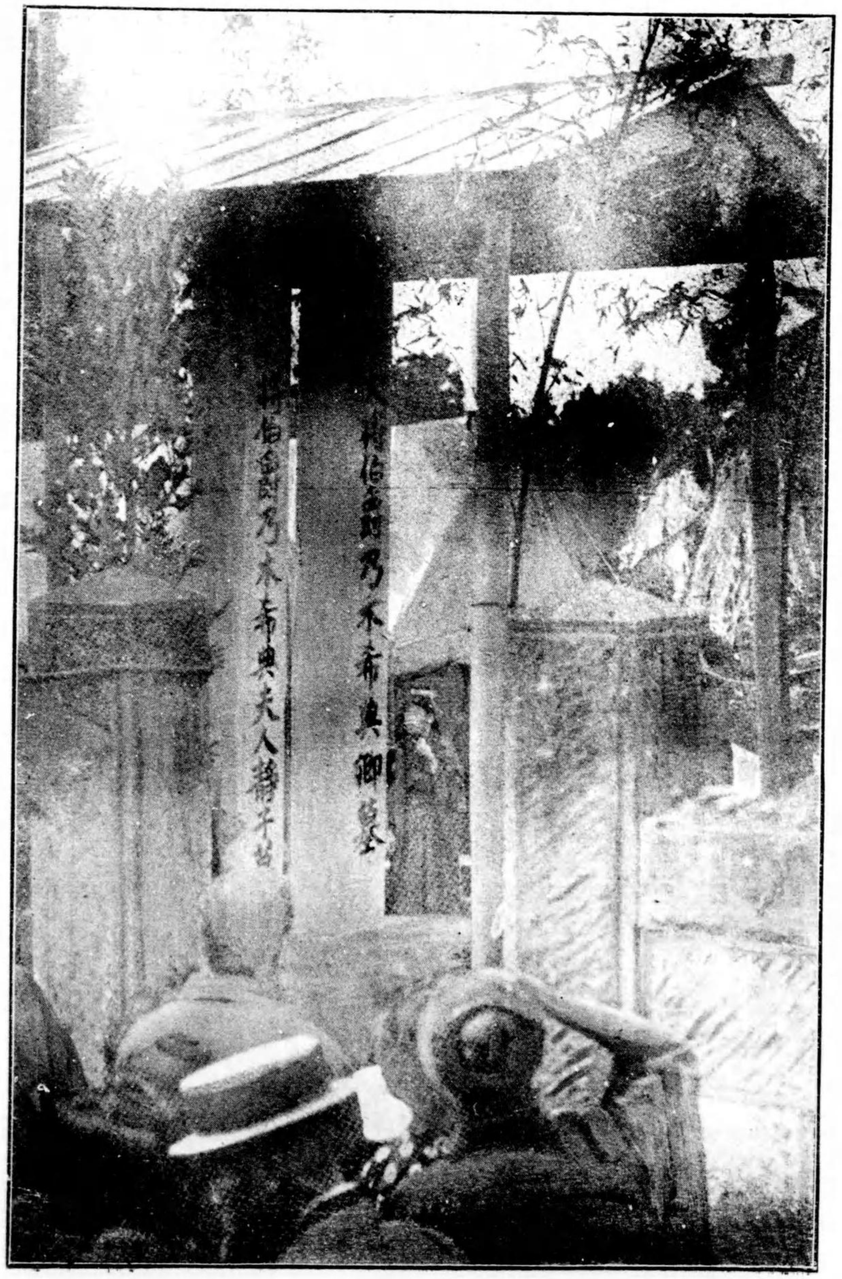
東京 敬文館發行

574
480









故乃木大將夫人の傳

夫人名は靜子と云ひ、鹿兒島藩士湯地定之氏の第四女、安政六年十一月二十七日薩摩鹿兒島に生れられました、明治十一年に乃木家に嫁がれまして、同十二年に長男勝典を、同十四年に次子保典を擧げられましたが、何れも日露戰役に花々しき名譽の戰死をなさいました、されど雄々しき、夫人は、その悲みを抑へて、出征軍人遺族の慰問や、恤兵品の拵へなどの世話に、夜も日も足らずお働きになりましたと云ふ事であります。夫人は至つて溫順な性質で、富貴の身でありながら、萬事につゝましくなさいまして、紀念寫眞なども只一度お撮りなさつた許りだそうであります、そして召使の者や貧困な者などには、大金をも惜まず惠まれました事、夫乃木大將そつくりのお方でありました。大正元年九月十三日と云ふ、明治天皇御大葬の日、夫大將が御跡慕ひて殉死せられました時、夫人躬らも、五十四歳を一期として、健氣な最後を遂げ天晴日本女子の面目を發揮せられました、誠に日本女子の鑑と申さなければなりませぬ。

乃木大將夫人の歌

吉丸一昌 作歌

（一）

還ります日のかしと聞く
君の御幸の悲しさに
御後慕ひしわが夫を
獨り立たせじわれもとて
刄に伏しゝ雄々しさや。

（二）

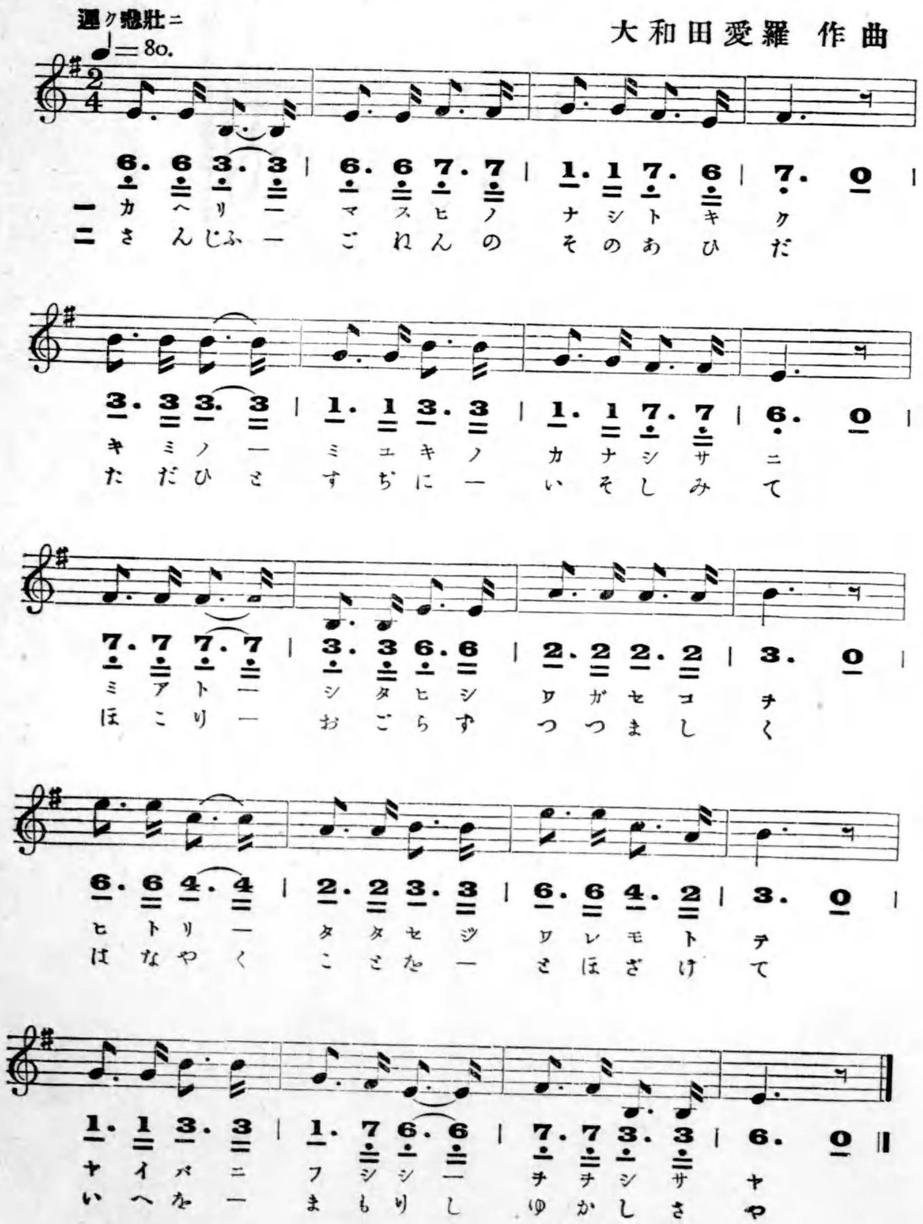
三十五年のその間
たゞ一筋にいそしみて
誇り驕らずつゝましく
華やくことを遠ざけて
家を守りし懷しさや。

大正
2. 3. 25
内交

乃木大將夫人の歌

（短ホ調四分二拍子）

大和田愛羅 作曲



(三)

わが夫のきみの心もて
御親の心安めんと
わが身忘れてひたすらに
誠心こめてかしづきて
仕へまつりし賢さや。

(四)

過し日露の戰には
二人の子ども二人とも
旅順の野べに打たせしが
悲しと人に言ひもせで
涙つゝみし健氣さや。

(五)

乃木大將の壯烈は
空にかゞやく日の如し
大將夫人の一代は
雪の中ふる白梅か
貞烈古今に秀でたり。

(六)

さくら花咲く日の本の
女の道はかくぞある
わかき女よ少女子よ
國家の爲ぞあけくれに
この姫鑑仰ぎ見よ。

(十一月十三日、夫人殉死の命日これを作る)

P-71

東京音樂學校教授吉丸一昌先生作歌

幼年唱歌
改題 新作唱歌

紙質優秀、裝釘美麗
第一集、第二集、第三集既刊
定價各金貳拾錢　送料各金貳錢

幼稚園を始めとして、小、中、女學校及び家庭用として、感興の湧くに從つて、作歌せられたるものに斯道の名家及び新進作曲家が、清新なる日本趣味的曲調と、平明なる伴奏とを以て作曲し、島崎教授が一々綿密なる校閲をなしたるもの、蓋し空前の良書なり。

大正元年十一月二十五日印刷
大正元年十一月二十八日發行
大正二年三月十日訂正再版發行
（定價金五錢 郵稅四冊迄金二錢）

作歌者 吉丸一昌
作曲者 大和田愛羅
發行者 神田區小川町四十一番地 樫村喜久太郎
印刷者 京橋區南紺屋町二十五番地 大邊社 岸山芳太郎

不許
謄寫
複製
蓄音機
吹込

發行所 東京市神田區小川町四十一番地 敬文館
（電話本局四八五五 振替東京一二三三六）

終